

日本とラテンアメリカ間の文化交流の現状について、最近調べる機会があった。ラテンアメリカといえばすぐ頭に浮ぶ固定したイメージがあるが、改めて実感したことは日本におけるラテンアメリカ文化への関心が予想以上に高まっていることであった。相互交流というよりも日本の方的なラテンアメリカへの関心というべきだが、ラテンアメリカは決して移住関係者や貿易関係者など一部の人々だけの関心の対象ではない。日本人一般の欧米先進諸国に対する関心には及ばないが、いわば草の根の間にラテンアメリカ文化への関心が定着していることは確かである。たとえば、ラテンアメリカ音楽は、長く日本人が親しんできた分野であった。愛好者の間で親しまれてきた『中南米音楽』という雑誌は、1952年に創刊されてから83年に『ラティーナ』と名称を変え、今日発行部数3万を数えている。

福島県川俣で毎年開かれるラテンアメリカ・フォルクローレの祭典が全国のアマチュア・グループを集めているのは有名である。近年日本にブームをもたらしたラテンアメリカ文学では、叢書刊行に先鞭をつけた国書刊行会の『ラテンアメリカ文学』(15巻)が3万部、つづく集英社の『ラテンアメリカの文学』(18巻)が25万部印刷された。さらに、第3の叢書『アンデスの風』(書肆風の薔薇)が刊行されている。これらの他にもラテンアメリカ文学の翻訳書がいくつも出版されている。

日本とラテンアメリカの文化交流といえば、専門家の派遣と招聘や学術交流に力を入れている国際交流基金の活動が第1にあげられるが、昨年同基金がまとめた『わが国における国際交流団体一覧』によると、実にさまざまな民間団体がラテンアメリカ諸国との交流を行なっている。わが国の109の大学がスペイン語講座を置き、うち14の大学にスペイン語科があることは、今後ラテンアメリカに対するより広い関心と文化交流の促進を助けることであろう。